## 【民俗部門】

沖縄の本土復帰後、宮古の人々の生活様式も大きく変化した。しかし、昔から引き継がれてきた伝統芸能や民俗行事などは、今もなお各地に継承され残されている。

民俗部門では、明治から昭和初期ごろのカヤヤー（茅葺き家）を再現して当時の住居生活を紹介するとともに、民具やレプリカ、ジオラマ展示を用いて農耕、・漁労・信仰・各地の民俗行事などを紹介している。

### ■御嶽祭祀

御嶽（ウタキ）とは、杜（ムイ）・山（ヤマ）・元（ムトゥ）・里の神・根所（ニードゥクル）と呼ばれる聖地の総称である。山や杜そのものを聖地と考え、そこに石や香炉を置いてイビと呼び、信仰の対象を祀っている。それが本来の御嶽の姿である。御嶽の神々には、時を定めて遠来する神や常駐して人々を守護する祖先神、個々の伝承と由来をもった英雄神・産業神・血縁的なもの・地縁的なもの、それぞれの神々が合祀されている。それらが神祭りを通して人々を守り、村の災いを除き、豊饒（ユー）をもたらすものとして信仰されている。

赤崎御嶽（下地字与那覇）

祖霊神・島立神・島守神、祝福をもたらすニライ・カナイの神、航海守護神が記されている首里王府の『琉球国御嶽由来記』（1705年）によれば、ニライ・カナイ神のように雨ごいに関係して航海守護を兼ねているのがふつうであるが、航海守護を専らにしている神が宮古にはみられるようである。御嶽祭神の性別が記されているのも宮古のみで、神の機能も、航海神、航海兼諸願、諸願、島守神などおおよその区別がされるという。御嶽では村の祭祀をつかさどる司（ツカサ）と呼ばれる神女を中心に、年間を通して種々の祭祀行事が行われる。御嶽は時として人々の立ち入ることの許されない場所であるが、祭りの日ばかりは人々が神と交流する場となる。そこに集う人々は敬虔な祈りの中で安らぎを得るとともに、終日神とともに過ごして村の繁栄や豊饒・家族の健康と守護を祈り、祝うのである。

宮古は、県内でも特に御嶽の数が多く、『平良市史』第7巻御嶽編に収録されている御嶽の数は800を超える。

◀バタス：祭祀行事の際、ンキ゜（神酒）を入れる容器として使用される

▼御嶽のサン：御嶽の祭祀行事の際、氏子たちが奉納するサン。
氏子の件数と各家族の人数が示される。

◀ツヌザラ・サラ：祭祀行事の際、ンキ゜（神酒）を注いで飲むのに使用される。

## ■宮古の主な年中行事

### 1．比嘉の二十日正月

城辺字比嘉部落では、旧暦1月20日に、「二十日正月」（パツカショウガツ）と称して祭り（祝宴）が催される。この日の行事として獅子舞いが出されるが、これは部落の厄払いを目的としたもので、部落を一周して厄払いを行うとともに、その年に新築・改築した家があれば、必ず、3回廻って厄払いする習わしとなっている。厄払い終了後、公民館広場で獅子舞を先頭に巻き踊りが繰り広げられる。

比嘉の獅子舞い

市指定無形民俗文化財

指定：平成17（2005）年9月27日

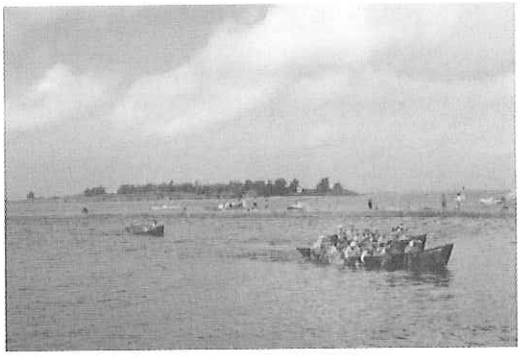
明治45年（1912年）に始まったと伝えられる。士族と平民が字有地の財産をめぐって争い訴訟事件にまで発展、比嘉部落の将来を憂慮した双方は、大正2年（1913年）和解した。その和解記念の祝賀行事に獅子舞・競馬・角力などを催したという。以来、この行事は「パツカショウガツ」として部落の繁栄と無病息災を祈願する獅子舞が継承されている。

### 2．砂川（ウルカ）のナーパイ

この祭祀は、旧暦３月初酉（とり）の日に、城辺字砂川のマイウイピャームトゥ（ウマニャーズ）で津波除けのために行われる祈願行事である。男性は、神前で２列縦隊に並び、木の枝をもって櫂（かい）に見立てて舟漕ぎの模倣動作をする。女性は、同所を出て地面に約30～40mの間隔で、縄でくくったダティフ（トウツルモドキ）をさし立て、神歌を謡いながら海岸へ下りて行く。海岸では東西二手に別れ、同じ所作をくり返しながらそれぞれの目的地に向かう。この所作は陸と海との境界を明示し、それによって津波除けを図るという。

この祭祀の由来については、『宮古島記事仕次』（1748年）の中に「津波で両親を失って、孤児となったサアネのもとに、竜宮からウマニャーズという仙女が現れて、夫婦になり、7男7女をもうけた。その後、ウマニャーズは津波除けの方法を教えて、再び竜宮へ去った」と記されている。

## 3．久松の御願（うがん）バーリー・獅子舞



旧暦5月4日に、豊魚と豊年を祈って行われる。早朝、ツカサを先頭に大泊（ウプドマリャ）御嶽、アンツア御嶽、ツガキ御嶽の順に御願したあと、二隻のサバニで御願バーリー（競漕）を行う。更に2回の競漕が行われ海上の行事が終わる。競漕するサバニには、竜を象徴する色彩などを施し、爬竜船とよぶ。ここまでは糸満ハーリーに類似する。このあと獅子舞が演じられる。獅子舞は中国大陸に由来すると言われるが、獅子面による舞いは東アジア方面、更にブータンからバリ島に到る宗教舞踏の中にみられる。獅子は百獣の王としてその威力が信じられ、それを舞う事によって、悪霊を払い豊年を招来し共同体構成員の繁栄がもたらされるものと考えられた。獅子は沖縄本島では一頭獅子で、宮古・八重山では二頭獅子となる。ハーリーと同じ日に行われるのは久松部落だけである。

ハーリー　旧暦5月4日に行われる競漕行事。宮古の漁村でのはじまりは、明治20（1887）年ごろといわれる。出漁してきた糸満の漁師がその年の地元でのハーリー行事に間に合うことができず、宮古でハーリーを行ったことにならい、年中行事にとりいれたという。平良の漲水での行事化は、明治40（1907）年頃、追い込み網漁を営むために移住してきた糸満漁民によるものとされる。

## 4．多良間・高野のスツウプナカ

多良間島の年中行事で、全島民が参加して行われる祭祀である。旧暦5・6月の壬辰（みずのえたつ）・癸巳（みずのとみ）の2日行われる。スツは節、ウプナカは祭り・祝いを意味する。その年の豊作に感謝し、来年の豊作を祈願する農耕儀礼である。四つの特定の祭場ごとに構成された地縁的な祭祀集団がイム座（祭祀用の魚をとる）、クバン座（供物を料理する）、カンジン座（祭りの費用徴収、準備、進行）、ブジャ座（祭場の作成、供物の管理）、中老座（祭祀実行の中心）という職能分担集団に分かれる。男性中心の祭祀である。

高野部落では、水納島（多良間村）出身の人々によって祭りが行われる。

一日目は、「スツウプナカ」と称し女性によってニーリが歌われ豊作・豊漁の祈願祭が行われる。二日目は、「アトヨーイ」と称し、ブジャ座で準備・管理された料理が供えられ、宴が催される。ブジャ座はバンマールといって一年交代である。祭りは二才頭の下で準備・実行される。

高野のスツウプナカ（平良字高野）

## 5．狩俣・島尻・大神島の祖先祭（ウヤガン祭り）

大神、島尻、狩俣の3地区で行われていたとされる秘祭である。狩俣ではウヤーンという。

ウヤガンとは村づくりにかかわった祖先神という意味であるが、そのウヤガンに扮する神女たちも、その祭祀の期間中はウヤガンとよばれる。数は15名程度。

大神では旧歴6月から10月まで、島尻、狩俣では10月から12月までの3ヶ月間に、5回にわたって山ごもりして行った。狩俣では5回の山ごもりは次のような順序でなされる。

第1回目は、「ジーグバナ」と称し、10月の丑（うし）の日に山に入り、4泊して5日目に終わる。その間、神女たちはウヤガンに扮装しフサとよばれる神歌を謡う。

第2回目は、「イダスウヤーン」と称し、新しくウヤーンになる神女を山に連れ出す行事が行われる。11月の酉の日に山に入り、3泊して4日目に帰る。

第3回目は、「マトゥガヤー」と称し、11月の申（さる）の日に、マトゥガヤーという屋号の民家において「タービ」（嵩べ）とよばれる神歌が謡われる。

第4回目は、「アーブガー・ウヤーン」と称し、11月の寅（とら）の日に山に入り、2泊3日で終わる。アーブガーとは野田山林の現在の養護学校付近の地名であり、神女（ウヤガン）たちはアーブガーまで行き神歌を唱える。

第5回目は、「トゥデャーギ」と称し、12月の申の日に山に入り、4泊5日で終わる。この時、村の男性氏子（ファーマー）は全員、大城ムトゥに参集して33拝（ミスゥパイ）を行う。これで冬のウヤガン祭祀は全部終了する。

ウヤガン祭祀はこのように、村の草創の神々を嵩べる、いわゆるカンナーギ（神名上）の祭祀であるが、この祭祀に参加する事によって、ムラ人たちは共同体の一員としての自覚を感じ取っているようである。

## 6．多良間の八月踊り

旧暦8月に催される多良間島の豊年祭で、島の年中行事のうちで最も盛大な祭祀である。字仲筋・字塩川それぞれに企画・運営し、字長が主宰する。踊りの場所は仲筋が土原（ンタバル）御願所、塩川がピトゥマタ御願所である。初日は仲筋の正日で塩川の住民を招待する。

2日目は塩川の正日で仲筋の住民を招待する。3日目は別れと称してそれぞれで行う。

初日は芸能を披露する前に、両字とも3箇所の御嶽に1年間の豊作を感謝し、翌年の豊作を祈願する。祭りの実施にあたり、①カンジン座　②スタフ座　③羽踊座　④組座　⑤ズーニン座　⑥獅子座　⑦笠座　⑧狂言座が組織され、それぞれ自主的に活動する。いくつかの踊りが3回くり返されたあと、組踊りに移る。

仲筋は午前に「忠臣仲宗根豊見親（とうゆみゃ）」、午後に「忠孝婦人」、塩川は午前に「忠臣身替（みがわり）」、午後に「多田名大主（ウフシュー）」を上演する。朝10時頃に始まり、その所用時間は8～9時間に及ぶ。

1976年5月、国指定重要無形民俗文化財となり、多良間村民俗芸能保存会が芸能保持団体として認定されている。

## 7．野原のマストリャー　〈国選択無形民俗文化財　選択年月日：昭和55（1980）年12月12日〉

上野字野原では、旧暦8月15日に豊年祭が催される。祭り当日、午前中には部落のツカサ・お供の2人が11ヵ所の御嶽を巡って1年間の豊作を感謝するとともに来年の豊作祈願を行う。夕方には、男たちが4ヶ所のマスムトゥ（貢租を集めた場所）に参集、酒を酌み交わし

談笑して時を過ごす。中秋の名月が中天にさしかかる頃、村人たちは部落公民館広場（ブーンミャー）に集まり、棒振りや踊りを繰り広げる。この時の「男組の棒振り」や「婦人たちの扇踊り・四つ竹踊り」を総称してマストリャーと言う。

○棒振り　棒振りは5人1組で構成され、前列に2人、後列に2人、その後ろに1人の順に並ぶ。各ムトゥからそれぞれ1組出る。

○扇踊り・四つ竹踊り
踊りの人数に制限はないが、3・4列縦隊に並び、先頭には扇を持った年長の婦人が10名ほど、その後方に四つ竹を持った婦人たちが続く。

「マストリャー始めの歌」の中の、“この踊りは普通の踊りではない、地頭主（役職名）の許しを受けて踊るのだ”という意味の歌詞は、人頭税時代を伺わせる。伝承によれば、6月頃穀物の収穫を終え7・8月に納税を済ました村人たちが、租税完納の喜びと翌年の豊作を神に祈願して、残ったわずかの穀物でンキ゜（神酒）を造り、祝い、踊ったのが祭りの始まりであると伝えられている。

8．池間島のミャークヅツ　〈県選択無形民俗文化財　選択年月日：昭和56（1981）年1月26日〉

毎年、旧暦8月～9月の甲午（きのえうま）の日から3日間にわたって4ヵ所のムトゥ（真謝・マジャ、上げ桝・アギマス、前の屋・マイヌヤー、前里・マイザトゥ）を中心に行われる池間島の民俗行事である。

1日目をアラビ、2日目をナカヌヒ、3日目をアトゥヌヒという。ミャークヅツにおいて各ムトゥで行われる儀礼は、55才以上の男性で構成されるムトゥヌウヤたちを中心に、年齢階梯的な組織で運営されている。

期間中、各ムトゥに所属するムトゥヌウヤたちは、早朝4～5時頃ムトゥに集まって酒を酌み交わして談笑して過ごす。酒や肴（さかな）はマスムイといってムトゥヌウヤたちの家族が未明に所属するムトゥに届ける。各ムトゥでは、スジャウヤ、ウイピトゥ、バカウヤと年長順に座りマスムイを受ける。特に2日目には、前年のミャークヅツ以後出生した乳児の家族が、早朝、ムットゥマイガーから若水（スディ水）を汲み、その水で乳児の体をふく。その後、ヤラビマスを所属するムトゥに届ける。ヤラビマスはムトゥヌカンに供えられ、ムトゥヌウヤたちに乳児の名前が紹介される。ヤラビマスを届けた者は乳児の健康等を祝する小魚をもらって帰る。大正時代以前は、ムトゥの長老がヤラビマスを持ってきた者を前に座らせ神酒をムトゥの中皿にうつし、これをその人にもたせて乳児の幸福を予祝するサラピャーシをうたったという。

午後4時過ぎになると、マジャムトゥを先頭に各ムトゥのウヤたちが池間・前里の境界にある水浜の広場周辺の所定の場所に座る。ツカサンマ（司母）たちによるクイチャーが行われた後、ツカサンマたちを囲んで一般参加のクイチャーが盛大に行われる。

池間島からの分村である伊良部字佐良浜と平良字西原地区でも同じくミャークヅツが行われる。佐良浜のミャークヅツは平成6（1994）年に市の無形民俗文化財に指定されている。

## 9．来間島のヤーマス御願（うがん）　〈市指定無形民俗文化財：昭和56年2月17日指定〉

ヤーマスとは、子孫や家の繁栄を祈願して行われるもので、下地字来間ではヤーマスプナカと称し、旧暦9月に初辰（たつ）から末（ひつじ）までの4日間催される。ヤーは家、マスは増すを意味する。

1日目は、島の東西に位置する2ヵ所の御嶽で、神女たちが二手に別れて夜籠もりして祈願する。2日目は、西の御嶽（タカガン）で籠もっていた神女たちが東の御嶽（ティンガンナス）へ移動し、そこで両方の神女たちが合流して前日同様祈願をする。3日目に神女たちは解散する。集落ではヤーマスヤー（家増す家）、ウプヤー（大家）、スムリャー（下家）の三家で、それぞれの氏子たちが集まって盛大に酒宴を催す。これは子孫繁盛を願うのが目的。4日目は、三家とも前日にひきつづき酒宴を催すがこれは家の繁盛を願うためである。なお、この日は夕方になると三家から氏子たちがムラの広場に集まって来て合流し、クイチャーや相撲などいろんな余興を演じる。その際、昭和35年ごろまではパーントゥという仮面神も出現したという。

## 10．池間・佐良浜・西原の世乞い（ユークイ）

池間島のユークイは旧暦9月の甲（きのえ）か戊（つちのえ）の亥（い）と子（ね）の両日を選んで行われる。ユークイのユーは「豊饒」、クイは「乞う」の意味でいわゆる豊饒祈願の祭祀である。池間島では数え51才から55才の婦人がユークインマとよばれる神役となり、ユークイ初日から村司たちと共にウハルズウタキ（ナナムイ）に入り、夜籠（こ）もりの神願いをする。2日目には、早朝、アーグシャー（神歌を掌（つかさど）る人）の神々を嵩（あが）める神歌があり、その後、司・ユークインマたちはナナムイを出る。その時の姿は、神羽の衣装を着け、頭にはカウシを巻き、両手にソーカ木の枝を持ち、腰には煙草入れ（プゾウ）をさげている。ナナムイを出たユークインマたちは一定の場所でクイチャーを踊り、ユークイヌアーグを唱和しながらムイクスンミ・ハナバリンミ・フナクス・アダニー・フィーガー・カータガーなどの拝所・御嶽をめぐって豊饒を祈願し、仲間豊見親の屋敷跡で「ユークイ」を報告、神衣装を解き納める。その後、ナナムイに行きマンサン（満行）の願いを告げて終了する。なお、このユークイの行事には、祭祀の最中、ユークインマたちを正面から見てはならないというタブーがある。

## 11．島尻のパーントゥ　〈県選択無形民俗文化財　選択年月日：昭和56（1981）年1月26日〉

平良地区島尻のパーントゥ・サトゥプナハ（里願い）は、年3回（旧暦3月末～4月初、旧暦5月末～6月初、旧暦9月初）行われるが、3回目には面をつけた来訪神が出現することから、パーントゥプナハとして知られている。来訪神は3体で、全身に蔓（つる）草のシイノキカズラ（キャーン）をまとって泥で化粧をする。その後、ウパッタヌシバラ（拝所）で5人の女性神役（ミズマイ）により祈願を行った後、、集落に出て厄払いをする。

パーントゥとは、異様な形相（ぎょうそう）をしたもの、つまり、お化け・鬼・妖怪というような意味の

宮古方言であり、プナハ（プナカ）とは、人々が寄り集まって行う祈願祭（お神酒で酒宴を行う）のことをいう。したがって、パーントゥ・プナハとは、パーントゥ神の出現する祭祀ということであろう。

この祭祀は集落の厄払い、つまり、パーントゥ神が出現して、集落から悪魔を追い払い、人々に無病息災を得させるという趣旨で行われているという。もっとも、邪悪払いの祭事というものは沖縄の島々のいたる所で行われているようであるが、ただその祭事の中にパーントゥ神が出現するのは大変珍しいことである。現在、宮古では、島尻・野原の2地区で継承されている。

毎年旧暦9月の吉日を選び、2日間にわたって行われる島尻のパーントゥの仮面は、木でつくられていて、親（ウヤ）パーントゥ（ンマパーントゥともいう）、中（ナカ）パーントゥ、子（フファ）パーントゥの3体には、大きさ・形ともそれほどの違いはない。仮面は祭り以外のふだんの日は、3体とも別々の場所に保管されている。

パーントゥに扮するのは、年齢についての定めはないが、だいたい高校生から20代の若者たちである。パーントゥは全身にキャーン（シイノキカズラ）を巻きつけ、その上からンマリガーの底に沈殿している黒くて臭い泥を全身にぬりたっくて、その姿で集落中を徘徊し、その泥を道行く人にぬり歩く。しかし、泥をぬられた者は、それによって厄が払われ、健康が保たれるというふうに、集落の人たちの間では信じられている。この信仰は今も根強く生きていて、例えば、出産があったり、家を新築したりすると、すすんでパーントゥを招き入れ、泥をぬってもらうほどである。

他に宮古島のパーントゥとして国指定されている民俗行事に、旧暦12月最後の丑の日に行われる上野地区の「野原のパーントゥ」がある。地元では、サティパライ（里祓い）ともいう。

## 12. 野原のサティパライ

島尻と同じく上野字野原にもパーントゥの出現する祭祀がある。その祭祀を「サティパライ」と称し毎年の旧12月最後の丑の日に行われている。このサティパライの祭祀にパーントゥが出現するようになった由来は定かでないが、一説に次のようなこともいわれている。

ある年のマストリャー（旧暦8月15日に行われる行事で、男の棒、女による扇と四つ竹の踊りなどがある）のとき、その行事を野原の後方の大通り（現自衛隊

前）で盛大に催したところ、行事終了後、悪疫が流行して多くの死者が出た。その時、妖怪（マズムヌ）が人間のまねをして踊っているから追い払わねばならないとのうわさが広まり、そこで、妖怪を追放するためにパーントゥが出現するようになったのではないかという説である。

このように、サティパライの行事には妖怪（厄）を追い払う意味があり、パーントゥがその役目を担っていることが知られる。

このサティパライの行事は何名かの男女で構成され、パーントゥに扮するのは男の人が1人である。他の男たちは小太鼓をたたき、ホラ貝を吹いて囃す。女たちは頭や腰にクロツグ（マーニ）やボタンヅルを巻き、両手にヤブニッケイ（ジッザギー）の小枝を持っている。歩きながら女たちが小枝をふり、「ホーイ、ホーイ」と声を出すと男たちが貝をブーブーと吹いて応じる。それでこのサティパライは、「ホーイ、ホーイ、ブーン」ともよばれている。交差点に来ると、2列隊形から円陣に変わり、3回まわってから円の中央に向かって、輪を縮めてしゃがみ、小枝をはげしくふって「ウルルル‥‥」と叫ぶ。最後に集落の南西にあるムスル嶺で装具の草や小枝を置き、巻き踊りをしてから帰る。

現在使用しているパーントゥの面は、古い仮面が老巧化した際に八重山でつくらせたものだという。

## 13. その他の年中行事

①大浦・久松・増原（マスハリ）の粟（アー）プーズ

粟の豊年祭り。粟の神酒をつくり里御嶽（サトゥウタキ）で祈願をする。

宮原では旧暦5月甲申、酉の日に行う。各家からヤーキマス（粟1升）と16才以上の男、正人マス（5合）を出す。ほとんどのサトが同様に行う。甲申（きのえさる）の日に西銘御嶽（北増原）、酉（とり）の日には飛鳥（トゥビトゥイ）御嶽で行う。

大浦では旧暦6月の寅の日に行い、6月プーズともいう。集落にとっては大きな行事で集落外、島外、県外で生活している人々もこの日は参拝に訪れる。

②スマフサリ

集落に巣くう悪霊を追い払うとともに、他所から集落に入ろうとする悪霊をも追い祓って、集落の人々の健康を祈願する行事である。狩俣・島尻・大浦・西原・久松など、宮古の各地域で行われている。

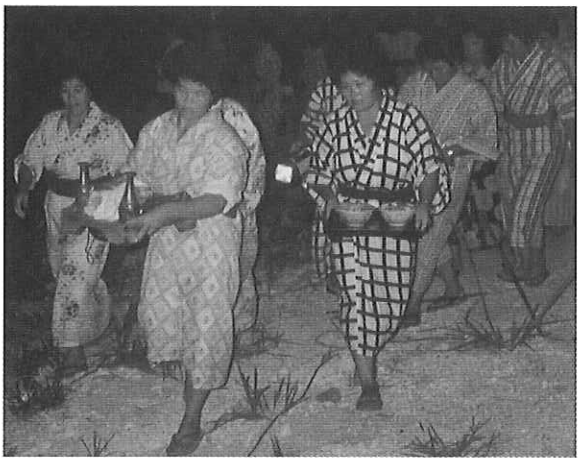
平良字西原

当日、集落の男性古老が寄り集まって豚を殺し、肉は共に食して助骨や肩肉をミーピーツナに吊し集落の境界や入り口に張り巡らす。ミーピーツナにはひげのようなものが突き出ていてトゲ の意味をもち、豚の骨を吊すのは、他所からの悪霊や集落から追い払った悪霊がまいもどって来るのを威嚇する意味があるといわれている。

島尻では、スマフサリに利用したミーピーナツをパーントゥ行事に使用し、西原では、6月カンニガイに殺した豚の骨をスマフサリの骨に利用している。

③六月神ニガイ

平良字西原のイーガマ御嶽で旧暦6月に行われる祈願行事。海神に豚の生け贄(にえ)を捧げ、豊漁と海上安全を祈願するもので、旧暦6月に行われることから”6月カンニガイ”と称される。行事は、ハナヌパーと称する5人の神役（ウーンマ・アーグシャー・ナカパイ・ウーンマヌトゥム・アーグシャーヌトゥム）を中心に、集落の数え50～56才の男性が参加して行われる。



当日夕刻になると、ハナヌパー・婦人たちは大主御嶽の北方にあるイーガマ御嶽に集まり、御願(ウガン)を始める。御願の最中に男たちは三々五々、御嶽広場に参集して御願を見守りながらミルク酒を飲み、談笑して過ごす。やがて一頭の豚がかつぎだされ、ウーンマによる一定の儀式のあと、海中に突き落とされる。その後溺死した頃を見計らって引き上げられ、集落の字長たち係の手で解体される。頭と股肉がイビに供えられ、再び、ハナヌパー、婦人たちの御願がなされる。それが済むとカバイと呼ばれる男性神役が、豚の頭・股肉をイーガマ御嶽の西方約30m先の浜に運ぶ。ハナヌパー・婦人たちもそれにつづき、浜辺で海に向かって合掌し行事を終了する。

④宮国の大綱引き

上野字宮国部落に伝わる盆行事の一つである。お盆の迎え日（旧暦7月13日）から送り日（旧暦7月15日）までの三日間、宮国公民館前路上において、毎晩、東西に分かれて大綱を引く。この大綱引きは、戦前七夕（旧7月7日）から送り日まで毎晩行われていたという。その由来については、農作物の収穫を祝い、次の年の豊作を祈願する御願綱(ウガンヅナ)として引かれてきたと言い伝えられている。この綱引きに使用される綱の材料はキャーンで、そのキャーンを捕るのは子どもたちの役目である。採った材料は東西の座に集められ、青年たちの手によって雄綱・雌綱が作られる。

## ■宮古島の葬式

人生の通過儀礼の中で、葬式ほど集落の人々と密接に関わる儀式はない。血縁者をはじめ、親族、地縁的な人々の参加をもって、死者の野辺送りは荘厳に行われる。これをダビ（荼毘）と称している。死者が出ると村人に知らされる。若者たちはガンヌヤー（龕屋(がんや)）に行って、集落共有のガン（ヤギヨウとも云う）を運び出し、葬具の組み立てや葬儀の準備を分担して行う。葬列は、オーズ（四法旗）持ち、ドラ・供花・前机(まえづくえ)（マイジャク）・坊主・位牌持ちの長子・ガン・遺族・近親者・一般会葬者と続く。そして、一門の墓地（ムトゥ）へ行き、村人と最後

の別れを告げて葬式を終了する。

龕（ガン）：葬式の際、棺を入れて墓まで運ぶのに使用される駕籠である。龕担ぎは前方4人、後方4人の計8人である。村や字には必ず共有のガン（龕）があり、村はずれの「ガンヌヤー」と呼ばれる小屋に普段は保管されていた。士族の龕は屋形で軽く、赤色に染められた荘厳な蓮花などの模様が彫られていた。平民のものは松材などで造ったため重たく、素材の粗末なものであった。

マイジュクヤー・龕・ズシガミ

マイジュクヤー（前机家）：脚の高い半屋根形の小屋である。中には中央に白位牌、その前方に香炉、香炉の両脇に燈明（ローソク立て）、その他団子皿、茶呑2個を置いてある。マイジュク家の両脇には、花立て、その側に小型の水入れが置かれている。開元までの毎日の焼香にはお茶をくみ替えたり、花を変えたり水甕の水に新しい水を入れたりする。

以前は49日間毎夕墓参りをしていた。この朝夕の墓参りを終わることをトゥズミという。トゥズミの日に墓に飾ってある銘旗・供花・弔旗・前机家・白位牌を総て焼く。墓参りに参加した人々はこの煙を身にふりかける様にして穢れを祓い家に帰る。

ズシガミ（骨ガミ）：洗骨後の骨を納めるカメ

**洗骨とは**　沖縄の葬制を特色づけるもので、墓室である期間経過した遺骨を取りだし、洗い清める改葬儀礼のことである。洗骨をおこなう時期は地域によって、または、家々によって一定していないが、①死者が出た時、②白骨化を待って洗骨するのが一般的である。ふつう1年未満だと洗骨せず、3年～7年の間に行う事が多い。洗骨儀礼に参加する人々は親戚に限られ、実際に遺骨を清めるのは肉親の婦女子で、男子はそばで見守っている。洗い終わった遺骨は、骨甕（厨子甕）に納め再び墓室奥深く安置する場合と合葬する形態がある。

（沖縄大百科事典・中巻 1983年 沖縄タイムス社）

## ■墓の形態と分布

1．**島尻の長墓（岩穴囲込墓：平良字島尻）**

島尻の長墓は近世の時期の大規模な風葬墓である。近年の発掘調査では貝斧をともなう先史時代の層もある。

2．**仲宗根豊見親の墓（平地式横穴式折衷墓：平良字西仲宗根）**

15世紀から16世紀にかけて宮古の首長をつとめた仲宗根豊見親が、父・真誉の子（マユ

ヌフファ）豊見親の霊を弔うために築造したと伝えられ、現在もその末裔、忠導氏一門が使用している。“ミャーカ”という宮古在来墓の形式と沖縄本島風の横穴式の折衷様式が用いられている。墓室は直径6メートル、高さ2.30メートルの円形で、中央に石垣が天井まで築かれ、それを境に前後2室に区切られている。手前の室が棺・副葬品の置き場で奥が骨ガメを安置する所である。石垣の中央部にある出入り口には、かつては観音開きの板戸が取り付けてあったことを示す閂（かんぬき）の跡が上下2ヵ所ずつ残っている。

3．アトンマ墓（横穴式掘込墓：平良字西仲宗根）　忠導氏の継室が祀られている。

仲宗根豊見親の墓とアトンマ墓に知利真良豊見親の墓を加えた「豊見親墓・3基」は、有形文化財・建造物として平成5（1993）年4月20日に国指定されている。これらの墓の特徴は、墓の入り口正面に「つんぷん」（ヒンプン）があること、墓室の上部に短い石柱が並んでいることことである。石柱の上端には凹状の欠き込み部があり、祭祀のときには凹みの部分に桁木をのせ、梁をかけて屋根を覆うことができる。
このような独特な構造の墓は県内他の地域ではみられず、貴重なものである。

4．一般の墓(横穴式平葺墓)

5．世渡崎のパナヌミャー（横穴式壁龕墓：平良字狩俣）

6．久松ミャーカ（平地みゃーか：平良字久貝・松原）

久松では古くから、ミャーカ（巨石墓）は”ぶさぎ”と呼ばれ、久貝、松原両字にまたがってかつては多数あったと推定されるが、現在確認できるのは4基である。墓研究については、稲村説「宮古在来の風葬墓地で、15世紀末ごろまで巨大なものへと発達、その後沖縄本島の影響を受けて横穴式へと移行」、金子説「1360年ころから元・明動乱をさけて、優秀な技術をもって大陸から渡来した一群の人々によって造られた」の2説がある。

久貝ぶさぎは仲宗根豊見親の夫人宇津目嘉（うつめが）の父安嘉宇立親の墓と言い伝えられている。仲宗根豊見親のころに宮古の石造建造物は著しく発達したとみられるだけに、久松ミャーカ群は、宮古の先史時代を解明していく上で重要な建造物である。昭和49（1974）年8月29日に市指定の建造物文化財となる。

7．四島の主の墓（横穴式掘込囲墓：平良字狩俣）

狩俣には「四島の主の墓」といわれている墓が四ヶ所あるが、一般的には、島尻、大神、狩俣、池間の四邑を遠望できる丘陵地にある墓をさしていう。この墓の構造はツガ墓に似て

おり、周囲には石積みの外郭が二重にめぐらされ、南南西に向かって一枚岩をのせたアーチ門が築かれている。墓室は一室で墓口が二つ設けられている。「四島の主」は仲宗根豊見親の支配下にあって仁政を施したがその業績としては、狩俣・島尻を結ぶ「渡地橋（ワタンジ）」築造のほか農道の改修、狩俣・平良間の休憩所設置、及び井戸の掘削などが伝えられている。

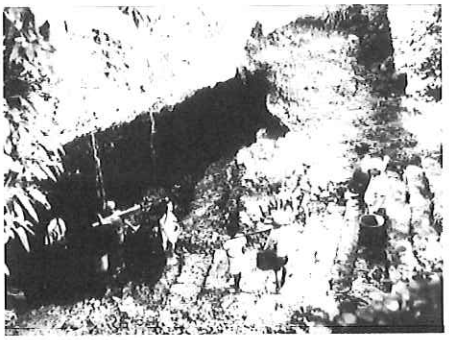
8．ツガ墓（横穴式掘込破風墓：平良字下里）

その典型が益茂（ますも）氏一門の東西2つの墓である。ツガとは升の意で、ツガ墓とは升のように真四角という意でも語られているが、他方多く人夫をやとい、石1升掘るのに粟1升を要したということでツガ墓というとの伝承もある。岩盤を掘り下ろしてつくられており、アーチ門と周囲に空掘りをめぐらしているのが特徴である。一般に墓地の屋根付き通用門は、石垣を積み上げて、上部に一枚岩をのせて通路にしているが、この墓のように岩盤を掘り下ろした上に、さらに正面の岩盤を掘り抜いて墓庭への往来に供した門は稀である。

なお、益茂氏一門の西ツガ墓は市の文化財として昭和52年・1977年3月16日に指定されている。

## ■水と生活

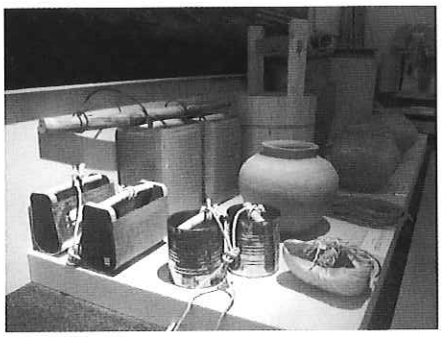
かつて、人々は水のえやすい場所を選んで村立てをした。崖下の泉、自然の洞窟内の水、凹地の湿地帯の溜まり水など、それらの水は人々の命をつなぐ大事な水であった。人々は、洞窟の険しい通路に石段を造って石を敷き、少しでも水汲みの労苦を軽くしようと努力した。この洞窟井戸を、俗に「降り井(ウリガー)」といい、水道が普及するまで利用され、今も各地に残っている。



盛加ガー（平良字東仲宗根）

その後、鉄製の道具が発達してくると各地に掘り抜き井戸が現れた。大正期に入り、瓦葺きの屋根から取水するコンクリート製の貯水タンク（水タンク）が普及したが、昭和35年ごろまでの取水方法は依然として降り井や掘り抜き井戸の地下水利用が主であった。

当時、水汲みは主に婦女子の仕事とされ、学童期の少年たちも家事の当然の手伝いとして水桶（カメ）を担いだ。渇水期になると、井戸端で順番待ちをしなければならず、時には、深夜に及ぶことも珍しくはなかった。



ワンブー：洗い鉢

水ガメ：飲料水や生活用水を入れる。かつては井戸の側に置いたり、軒下に置いて天（雨）水受けに使っていた。

クバズゥー・カニズゥー：つるべのこと。クバの葉を利用して作ったものがクバズゥーで井戸水を汲む時に使用した。小石をひもで吊し降ろしやすいようにしてある。空き缶を利してつくったものをカニズーとよんでいる。

## ■漁業

島を取りまく珊瑚（サンゴ）礁の内側の海は、俗にイノーと呼ばれ、魚介類の種類の多い豊かな漁場である。人々は、干潮時に干潟やピシ（干瀬）で簡単な漁具を用いて魚介類をとった。遠浅の海に石で築いたカキス（魚垣）の漁、主に個人で営む採貝や突漁、数人で引く網漁など、ほとんどが干潮時の沿岸漁猟である。

島の周りの浅海や干瀬は、昔から人々の漁猟の場所であるが、舟や漁具が発達してくるといきおい漁猟法も変わり、漁場の範囲も広がった。釣漁や網漁では、一本釣りや追い込み網漁が発達し、一統で数十人規模の共同漁猟も現れた。干潮時の素もぐり突漁や採貝採藻など個人漁猟は、人数は少なくなったとはいえ今も続けられている。

宮古の漁場は明治後期に始められたカツオ一本釣り漁業で大きくかわった。カツオ節は宮古の特産品となって島の経済をうるおした。

サバニ

サバニは、古くは1本の木をくり貫いて造られる「くり舟」のことをいう。琉球王朝末期に剥ぎ舟が奨励されはじめ、今日ではサバニといえば、ほとんどが杉板を接ぎ合わせて造った「はぎ舟」である。サバニ造船技術が未熟な頃は、池間、久松の漁師たちは、本場の糸満から買い求めたという。

サバニは、糸満のほかにも、垣花、屋慶名、与那原、浜比嘉あたりで盛んに造られたが、宮古の漁師たちは、主に糸満、次いで垣花のサバを買い求めた。

ユートゥイ

サバニにたまったアカ（雨水・海水）を汲みすてるときに使用する。一本の木で削って作ってある。サバニの底にピッタリとつき水が汲みやすいようにできている。長年の漁師の経験から作り出されたものである。

フダミ

アダンの気根を利用して作った草履。磯漁の際使用する。漁に行く女性に主として愛用される。

ミーバクイス

延縄（はえなわ）漁で縄が海底の障害物に引っかかった時、ミーバクイスを海中に下ろして障害物を割ったり糸をずらしたりする。

インミガニ

水中眼鏡。漁貝や海草類の所在を探知するための漁具である。ガラスが自由に使えるようになった明治以降のもので、生芋にガラスをはめたものから始まり、鉛や牛の角、後に軽くて扱いやすいモ

ンパノキ（スソゥギー）を用いるようになったという。同じ漁具に箱眼鏡（タマタゴ・タグカガミ・タル）がある。

「魚垣」（カキス・カキ゜・カツ）

潮の干満を利用して行われる原始的な漁法。遠浅の砂地に石を並べて積む。左右に開いた袖部は浜に向かって広がり基点の部分（ブフガ）で魚を捕る。満潮時には石垣は海面上に出ない。引き潮になって逃げ遅れた魚は石垣内に封じ込まれ、網の仕掛けられたブフガに入る。魚が入るのをみて網を引き上げる。魚垣は戦前まで利用された。垣漁は普通数戸の共同所有になっており、個人の所有権は売買出来た。

伊良部字佐和田の西方、下地島空港の北側滑走路埋め立て地約200mの所、カタバルイナウ（内海・イノー）にある「魚垣〈カツ〉」は市の有形民俗文化財〈昭和54（1979）年5月11日〉に指定されている。高さは、海底の地形にあわせて、高い所で約1m、低い所は約50㎝、域内の面積は約3haで、石垣は二重構造（二重積み）で頑丈にできており、出口の水路は、幅約50㎝、長さは約3mである。

八重干瀬（やびじ）

池間島の北の沖合に発達した大小100を越す広大なサンゴ礁（リーフ）群である。その範囲は周囲約25㎞（南北10㎞、東西6,5㎞）ほどあり毎月大潮の際の干潮時に2～3時間ほど海上に姿を現す。このサンゴ礁群には、昔から種々の魚介類が豊富に生息しており、池間の人々は、昔からここを最良の漁場として生活を営んできた。サンゴ礁にはそれぞれ名称が付けられているが、これはすべて池間島の漁師（海人・イシャ）が命名したものである。池間の言葉でつけられたリーフの名前は、約140を超え、そこで獲れた魚介類や人体にたとえた、ンナ・ヌ・ヤー（サザエの家）、ウル（海藻）、カナマラ（頭）、ドゥ（胴）などのリーフ名がみられる。八重干瀬については、日本民俗学の父柳田國男が『海上の道』の文中で「宮古の八重干瀬とその周辺の島々で豊富に得られる子安貝（宝貝）を求めて中国から一群の人々が渡来、稲作技術をもっていた彼らが適当な島々を求めて北上し、九州地方に移っていった」というロマンに充ちた日本人の起源説を唱えている。

## ■農耕

宮古では、農業をムズフィ（毛作）という。山野に生ずる自然物から食材を得た時代を過ぎ、農耕生活へ移行すると、サトイモ、アワや麦、サツマイモの順で主食の作物が栽培されるようになった。時代ははっきりしないが焼き畑農法も行われていたようである。粘土質の低地では水田が開かれていたが面積は僅かだった。

昭和15年ごろの宮古

人頭税制の頃の主要作物は、貢納物であるアワ（粟）と主食のサツマイモであるが、そのほかに自給自足の生活に必要な麦類や豆類も栽培された。耕作地が遠くにある人たちは、そこに番小屋を建て、数日寝泊まりして働いた。大正期になるとサトウキビ栽

培が次第に盛んになり、農家経済を支える主要作物になった。農具を方言でパリドーウ（畑道具）といいますが、中でもアワやサツマイモが中心であった農耕では、ピラ（へら）・フファツ（鍬）は農具の代表的なものだった。牛馬は古くから飼養され、田畑の土起こしや製糖小屋の圧搾機回転など、広く利用された。

宮古馬

沖縄県の天然記念物である。宮古馬は体の高さが120㎝くらいの小型の馬で、頭が大きい割には胴体の後部は貧弱である。蹄（ひづめ）は太くて堅い。毛色は、粕毛（かすげ）（コーザ）が多く、鹿毛（かげ）（アカウマ）、栗毛（くりげ）（クルギャ）も見られる。性質が温順で粗食と重労働に耐え、老人や女、子どもにも容易に使役できる宮古馬は、古来、良馬として高い評価を受け沖縄本島各地に移出された。藩政時代の官馬は、多くは宮古から供給されたといわれ、明治・大正のころ、那覇では宮古馬が大半を占め、競馬にはもっぱら宮古馬が使用されたようである。

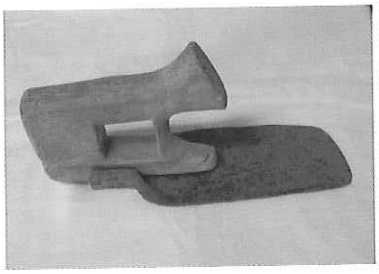
このように長い歴史の中で、宮古馬は農耕、運搬など人々の生活に利用され、宮古の風土にあわせて変化してきたと考えられる。近年の農耕などの効率のよい大型馬への改良や、近代化に伴う農耕の機械化と運搬手段の合理化が進み、宮古馬が急速に減少する中、市や宮古馬保存会が中心となってその増頭策が図られている。

宮古馬は平成3（1991）年1月16日、沖縄県天然記念物に指定された。展示されている宮古馬は、昭和11年に生まれ、昭和58年死亡した「太平号」の剥製である。

アーカイザラ（粟苅り鎌）

粟（あわ）（アー）の穂を刈り取るときに使用する。全長14㎝ほどの小さな鎌で、親指を使って粟の穂だけが刈り取れるように作ってある。

アーカイザラ▶



◀ピラ（へら）

粟作りの農作業でもっとも多く使用される農具、ヘラのことである。除草やサツマイモの植え付け、落花生の収穫などピラの用途は広い。刃（鉄）の部分のみをピラ、柄の方をピラツカと呼び、柄の部分は自分で取り付けた。労働から起こる神経痛をピラ・ガヤという。古謡の中に見える農具はほとんどピラである。

フーマボウ

豆・粟・麦などの脱穀用具である。短い方の棒を持って長い棒をふりまわし、穀類をたたく。短い棒は軽くて弾力性のあるヤラウギー（テリハボク）を用い、長い方は重い木を使用してある。

## 農事暦（旧暦）

| 農事暦 | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 月 | 二十四節季 | サトウキビ | | | サツマイモ | | 水稲 | 麦 | 粟 | 下大豆 | 大豆 | ゴマ | 落花生 | 二十四節季の呼び方（字東仲宗根） |
| | | 夏植 | 春植 | 株出し | 夏芋 | 冬芋 | | | | | | | | |
| 1月 | 小寒 | 収穫 植付より一年半 製糖 | 植付 | 収穫 | | 収穫 | 田植 | | | | | | | ショウカン |
| | 大寒 | | | | | | | | | | | | | ダイカン |
| 2月 | 立春 | | | | | | | | 除草 | 播種 | 播種 | | | タティハル |
| | 雨水 | | | | | | | | | | | | 播種 | ウスイ |
| 3月 | 啓蟄 | | 収穫 | 除草 | | | | 収穫 | | | | | 播種 | キーチツ |
| | 春分 | | | | | | 除草 | | | | | | | ハルヌピンガン |
| 4月 | 清明 | | | 施肥 | | | 除草 | | | | | 播種 | | シーミー |
| | 穀雨 | | | | 植付 | | | | | | | | | コクウ |
| 5月 | 立夏 | | | 中耕除草施肥 | | | | | | | | 除草 | | タティハル |
| | 小満 | | | | 除草 | | | | | | 収穫 | 間引 | | ショウマン |
| 6月 | 芒種 | | | | | | | | 収穫 | | | | | ボースゥ |
| | 夏至 | | | | 施肥 | | | | | | | | | カーツー |
| 7月 | 小暑 | | | | | | 収穫 | | | | | 収穫 | | ショウショ |
| | 大暑 | 植付 | | | | 植付 | | | | | | | | タイショ |
| 8月 | 立秋 | | | | | | | | | | | | 収穫 | タティアキ |
| | 処暑 | 中耕 | | | | | | | | | | | | トゥクルナツ |
| 9月 | 白露 | 除草 | | | | | | 播種 | | | | | | ハクルー |
| | 秋分 | | | | | | | | | | | | | 8月ピンガン |
| 10月 | 寒露 | 施肥 | | | 収穫 | | | | | | | | | カンル |
| | 霜降 | | | | | | | | | | | | | スムゥクダル |
| 11月 | 立冬 | 培土 | 収穫 | | | | | | 播種 | | | | | タティフユ |
| | 小雪 | | | | | | 播種 | | | | | | | コユキ |
| 12月 | 大雪 | 収穫 | | 収穫 | | | 播種 | | | | | | | オオユキ |
| | 冬至 | | | | | | | | | | | | | イミショウガツ |

ンムープリャ

グス（串）ともいう。サツマイモの掘り取りや除草などの農具として、干潮や干潟での魚介類採集道具として使用される。一般に男がピラ、ンムープリャを女が持つ。ピラと並んで古い道具。

バーキ

竹の皮を主に使ってある。イモを運搬するときなど、このバーキに入れ頭上にのせて運んだ。芋などの野菜を入れる単なる容器としてソーキがある。

ユニピキウス

脱穀した粟をユニという。粟を碾(ひ)く臼である。素材は松木で臼の上部からユニを入れ、座って両足を伸ばし、左右の縄を交互に引いて臼を回す。2人で臼を挟んで碾くこともある。下をビキウス(男臼)、上をミーウス(女臼)という。

ユイ：ユイは「ふるい」のことで米や麦のもみ殻を選りわけるために使用する。宮古では、普通、丸い形をしたムイゾーキが用いられており、この形はめずらしい。

トーニ：豚・牛・馬など家畜の餌（エサ）を入れる容器である。普通松の木をくりぬいて作った。

マグ（マーグ）

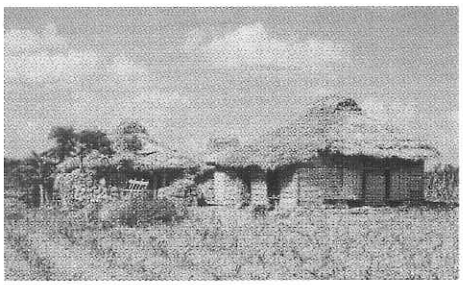
穀類の運搬、屋内での雑物容器として使用した。マカヤ（チガヤ）をマーニ（クロツグ）の皮やコーズ（トウツルモドキ）を細かく裂いた繊維でなった縄を巻き上げて作る。

## ■住居（カヤヤー　スゥイヤー）

屋根をカヤで葺き、柱に貫を通してイスディ（礎石）の上に建てる家のことでる。

大正の頃の民家はほとんどカヤヤーであった。カヤヤーの大きさは、2間半（約4.5m）×3間（約5.4m）の七坪半ほどの家が多く、柱は大正の初め頃までは主として松木を使用した。しかし、宮古は高温多湿のため、材木が腐食しやすく、白蟻や松喰虫の侵されやすいので、それを防ぐため松木を海浜の砂に埋めておき、何年か後にその潮漬けされた材木を取りだして建築に用いるという方法をとった。大正の終わり頃からは、松木に代わって杉材や桧・キャーギ（イヌマキ）材などが多く用いられるようになた。

◀このカヤヤーは、明治～昭和初期頃の宮古のある程度裕福な農家を想定して復元したものである。2間（3.6m）×3間（5.4m）の規模で家の中にはズーユー（地炉）が設けられている。トーウワ（台所）は別棟のスゥイヤー（添家）に設けられた。



▲1953年当時のカヤヤー

▲ヤドゥムリャ

魔除けのためスイジガイを出入り口の壁にぶら下げ、家の中に入り込もうとする悪霊を追い払うお守りである。現在でもその習慣が残っている。

ポーツ・ポーキ

ほとんどが自家製。ススキや稲ワラで作られたほうきは室内で使われ、マーニ（クロツグ）の繊維と葉を素材にしたものは庭ほうきとして、ソテツの葉で作られたほうきは台所の土間で使用された。

ブラヤックン

ホラガイ（サグヌイ）を利用した湯沸かし。大きなホラガイに一つの穴を空け、柄を差し込んで作る。

ズーユー（囲炉裏）の上部に自在かぎで吊しておく。鉄製品が普及する以前、宮古の人々は自然に手に入るホラガイを工夫してやかん（ヤカン）を作った。

バサギン

着物のことをキ゜ンという。明治の後半頃の普段着は男も女も芭蕉衣（バサギスン）であった。女性は自分でバサスギンを織って着る人もいたが、大抵は金で買い求めていた。明治の終り頃になると、木綿の単位ものが出まわるようになり、ほとんどの人はそれを店から買って着ていた。その頃にはバサギスンを着る人はあまりおらず、バサギスンを着るのは自分で機織りのできる女の人だけであった。

ツヅカサ

素材はマグと同じ。口の部分を小さくしてふたをつける。穀類（種もの：大豆・麦・島米など）の貯蔵に用いたが、多くは衣類の保管・整理容器として大正中期まで用いられた。

アダンバサバ

アダンの葉で作った草履（ぞうり）

ミンガミ

調味料（油脂、塩、みそ等）を保管する容器